

王朝文学研究の道

——学問と私——

清水文雄

一

がらにもないことを引き受けてしまったようだ。「学問と私」ということばの意味をまともに考える心の余裕がすこしでも私にあったら、「学問」という嚴肅な価値体系の前に「私」が畏縮して、何も言えそうにないという反省が生まれただけである。しかしこうなつた以上は、覺悟を決めなくてはなるまい。

かえりみれば、私のささやかな研究の歩みのうえでも、敗戦という民族の悲運は、まさに重大事件であつた。終戦の詔書は栃木県日光町で聞いた。ちょうど勤務先の学習院の学生を連れて疎開生活を送っていたときである。その九日前の八月六日に米軍の投下した新型爆弾（のちに原子爆弾と判明した）のために、広島が全滅したとの報に、広島に近い郷村に疎開させてあつた家族のうえも案じられたが、どうすること

もできなかった。

家族はともかく無事であることがわかったが、親類や知人、そのほかたれかれの死が、つきつきと知らされてき、塵壙と化した広島の地には、七十年間は草木も芽ぶかぬというようなうわさが、どこからか流れてきた。中学の後半から大学までの十年間を過ごした、いわばわが青春の故地広島が、一瞬にして壊滅したという報を、私はいいようもなく悲しいものと聞いた。まもなく終戦の日を迎えたが、戦後の人心の荒廃と世相の転変が、私の不安をしだいに色濃くしていった。

昭和二十二年春、私は意を決して広島に帰ることにした。帰ってどうするという成算などあるはずはなかったが、ともかく郷里の山河の間に身をおいて、しばらく安息のときを持ちたいという思いからであつた。さいわいに当時広島師範学校長であつた恩師辻幸三郎先生の恩命で、同校に勤務することになり、郷村の妻子のもとからそこに通つた。戦後の広島

にはじめて下り立ったのは、終戦の年の十月であるが、まだどこかに黒こげの死体がころがっているかもしれない廃墟の一角に立ったまま、私はしばらく身動きすることもできなかった。見るかげもなくなくなった青春の故地をいとおしむ思いが、そのときせつなく私の身内にわいてきた。それは一種の感傷であったかもしれない。しかし翌々年の帰郷の決意を促したもののなかに、この感傷がまじっていなかったとはいえない。

ともかく、私は広島に帰ってきた。そして敗戦によって痛手を被った私の学問の再出発をはかる所は、ここをおいてはなないと考えるようになった。

大学卒業後現在まで、王朝の文学、とくに和歌文学がおもな研究対象となってきた。もはや和歌との縁は切っても切れぬものとなったのだろうか。反省してみると、和歌とのこのような結縁は、農村の勤労青年だったころの孤独の感傷が、和歌の律動にのせられ、三十一文字の形式に転身させられていった、未熟ながらの詠歌体験にあると思われる。それが他の表現形式を用いないで、主として詠歌の方へ向かったのは、私の内なる生のリズム（それは生地自然环境にたぶんに影響されていた）によるところが大きかったといえよう。私にとってはすべてがおのづから成りゆきであり、学問の再出発をはかるとき、その対象領域が主として王朝の和歌文学となることも、自然の数であった。

ところで、この和歌について、私には終戦時から持ちこしている問題がある。それは、もう長く歌作からは遠ざかっていっているものの、私の内に深く根をおろした「和歌的なもの」をどう処理するかの問題である。それは終戦時の心の動揺をどう鎮めるかの問題と別ではなかった。中野重治氏はかつて「歌のわかれ」を書いた。中野氏が学生時代からその制作に親しんだ和歌との訣別を語った小説である。しかし私は、私の内の「和歌的なもの」と訣別することができようとは思わない。してみれば、道は一つしかない。私の内の「和歌的なもの」をどう処理するかである。それは学問のうえでは、和歌の伝統をどのように受けとめ、どのようにしてそれを新しい文化の創造の契機たらしめるかということであった。

こうして、戦後の私の研究課題は、和歌世界の構造を明らかにすることが中心となった。和歌世界の構造を明らかにすることは、とりもなおさず、わが民族の精神構造に究明のメスを入れることにほかならぬ。このような至難の課題が、私の方で容易に解明されるとは思わないとしても、この課題の解明に力をいたすことを、戦後に生き残った私の責務と思うようになった。

ともあれ、文化の不毛をかこたれた広島で、古来「はかなきこと」といわれた和歌、それも多く王朝の「たわやめぶり」の和歌の研究に力をいたす——この逆説を身をもって実証してゆく以外に私の道はなさそうに思われた。

このようにして、広島での生活が再び始められたものの、私自身は依然として混沌から脱しえず、研究と名づけうるものは、遅々としてはかどらないまま、やがて学制改革が行なわれ、師範学校は広島大学教育学部東雲分校として発展的解消を遂げた。新制大学の初期の数年間に大学の内外から出された、ガリ版刷りを含む小冊子のあれこれに、かろうじて断想の類をのせる程度であった。今春の定年退官を記念して出版した随想集『河の音』の初めのはば三分の一を占める諸文に、そのころの私の心のかかりはつきり現われている。そのことを、この書の出版を機に、私は改めて確認することができた。

二

私は広島の高等師範学校を昭和四年に卒業した。ちょうどその春新設された広島文理科大学に級友数名とともに進学したが、私自身に確固たる決意のようなものがあってではなかった。教育界に就職難が訪れていたところで、さしあたりそうしたことに心を労したくないという、安易な気持からかもしれない。その点からいうと、すでに数年の教壇生活を経験した諸先輩が、母校の上に新設された大学に堰を切ったように押し寄せてきたのとは、動機も事情も相当ちがったものがあったといつてよい。

高等師範でも卒業論文が課せられたが、私は正岡子規の和

歌革新について書いた。指導教官は齋藤清衛博士であった。齋藤先生から今日まで被りつづけている学恩は測り知れぬものであるが、文理大入学早々、先生は私に一つの課題を与えてくださった。それは、古代から現代にいたる各時代各流派の代表歌人を選び、それぞれの歌風をもっともよく表わしていると思われる歌を選出することであった。私はその年の夏休み全部を当ててこの仕事に没頭した。結局選んだ歌人は計百二十八人であったが、勅撰集・私撰集・家集などに収められたこれらの歌人の詠作を精魂こめて読む機会が与えられたことは、大学にはいつともかく研究生活と名づけられるものへ第一歩を踏み出したとはいえ、まだ五里霧中にあつた私にとつて、得がたい幸運が恵まれたといわなければならぬ。未熟ながらも和歌の詠作に親しんでいた私の前に、その

和歌が私の生涯の研究対象として立ち現われる機縁がここにつくられたことになる。それに付いても、正岡子規を対象とする卒業論文を指導してくださった齋藤先生が、この課題を介して先生のお仕事にあずからせてくださったことの意味は、時がたつにつれてさらに深く理解されてきた。そして先生の深厚なご恩情に、改めて感銘するのが常である。

こうして、私がお手つだいさせていただいた歴代和歌の選集は、翌昭和五年一月、「作者別名歌集成」という一冊となつて、東京の藤井書店から出版された。

文理大の国文学科には、鈴木敏也・土井忠生両先生がおら

れ、高師から東条操先生が兼任講師としてみえていた。時あたかも、国文学界は池田亀鑑博士を中心とする文献学派の全盛期で、研究方法の問題で模索をつづけていたわれわれも、直接間接にその影響を受けざるを得なかった。同級の二名と私は、折りから幹部候補生として広島連隊に在営中だった松田武夫氏の好意によって、池田博士に近づく機会が与えられ、休暇になると相たずさえて上京の時を持つようになった。私は、池田博士から、和泉式部歌集の研究が未開拓の領域に属することを指摘され、その歌集を研究対象として選ぶことについても、懇篤な勸奨を受けた。ほそぼそながら今日までつづけてきている和泉式部研究のきっかけが、今はなき池田博士によって与えられたことを、熱い思いで今思い返している。

しかし「和泉式部正集の形態に関する研究」を大学の卒業論文の題目として決め、その指導を土井忠生博士にお願いしてからは、資料の探訪・整理から、論文の起草とその高閣にいたるまで、それぞれの段階において、土井先生の懇切な示教を仰ぐことができた。そればかりでなく、先生の、テニテハ一字もゆるがせにしない、厳正にして精到な古典解釈と講義からは、〃ことばをみつめること〃の重要さを教えられた。私自身、文学の問題は結局ことばの問題であるという自覚に達した今日、あのころの先生が教室で身をもってお示しになったことの意味を、はっきり理解することができるよう

な気がする。このことは、私の文学に対する一つの開眼を意味するものでもあった。

戦争が末期に近づくにつれ、都市居住者の地方疎開もはじまり、家族の別れ別れの生活が常態になってくると、教育も研究も、そしてそれにたずさわる者の心も、日常性をそのまま保持することが困難になった。

戦時最後の冬の、ある雪の夜のことであった。そのころ私は、東京下落合にある学習院昭和寮に、同じく妻子を疎開させた同僚たちと住んでいた。警戒警報が出るたびに徒歩で十分ばかりの校舎を守るために出かけねばならなかった。その夜のことをしるした手記のなかに、つぎのような一節がある。

「雪はまだしきりに降りつづいていた。戸外に下り立つとすでに積雪は膝に届くばかりである。

寮の門を出てまっすぐに三町ほどゆくと、ひろいアスファルトの通りへ出る。深夜の大通りを、同僚のY氏と二人で、降りつむ雪を踏みしだいて歩きながら、私は妙に昂然たる思いにとらえられていった。

〃Yさん、こんな和歌知っていますか、和泉式部の。――待つ人の今もきたらばいかげむ踏ままくをしき庭の雪かな……待つ人の……〃

私はY氏の返事も待たないで、小学生が軍歌を歌いながら

遠足にでも行くような気持ちで、兵隊グツを力強く踏みつけ踏みつけ、歩調に合わせて何度もくり返しこの歌を朗唱した。朗唱しつつ、〃もういつ死んでもいい〃という思いが油然とわき立ってくるのをおぼえた。」

和泉式部のこの恋歌が、一刻一刻を、それこそ最期の思いで送っていた空襲下の帝都の生活の、ふとしたはずみに口を吐いて出たあの夜の体験を、私は今も忘れることができない。そして戦争へのこのようななかかわり方で、あのころの私の心のなかに生きつづけていた〃和泉式部〃というひとを、世にも不思議な詩人として、改めて思いみるのである。

三

昭和三十一年三月、岩波文庫の一冊として「和泉式部歌集」を刊行し、翌年六月、同じ文庫の「和泉式部日記」（昭和十六年七月初版）に全面的な改定を加えて、改版本を出す機会を持った。

この、歌集・日記の校訂の作業を通して、ながく空転を繰り返していた心が、ようやく年来の研究対象に食い入る積極的な姿勢を取り戻すことができたのは、しあわせであった。

大学の卒業論文を發展させて、「和泉式部歌集の研究」としてまとめたという思いは、以前からあった。旧制大学の学位論文審査機関は遠からず廃止される運命にあるが、できればその前にしかるべき形にまとめ、恩師土井先生の高闊を

得ることができたらというのが、私の願望であった。

和泉式部歌集は、現在のところ五類に分けてみる事ができる。そしてその中心をなすものは、従来一般に正集・続集と呼ばれてきた二類である。私の「和泉式部歌集の研究」は、いわばこの正・続集を対象とする文献学的研究である。ところがこの両集に共通に見られる顕著な現象は、両集の間にも、両集それぞれを構成する歌群の間にも、重出歌が多数見られるということである。このことは、正・続両集の成立を考察する際に重要な手がかりを与えてくれる事実である。私は、この事実をどう解釈するかが、和泉式部歌集の研究のポイントであると思っているが、本研究では、この事実の正確な認知に主力を注ぎ、正集・続集それぞれの成立のうえにこの事実を意義づける作業は、まだ十分遂げられるまでに至らなかった。これは今後に残された課題である。

ともあれ、一応まとまったものを学位請求論文として提出したのは、昭和三十六年春であった。何よりも、再度にわたる土井先生の高闊を仰ぎえたのは、冥加に尽きるというほかない。

一方、三十一年四月、私は教育学部に配置転換され、改めて国語教育を対象とする研究とその指導に専念することになった。すでに先学による国語教育学の樹立の要請があり、その方向への努力が積み重ねてきていることは承知していた。そ

のことがまた私に勇氣を与えてくれはしたものの、正直なところ、〃国語教育〃が学の対象として十分耐えうるものかどうか、少なからぬ危惧が私にはあった。しかし、その前途に多難が予想されるとしても、それが全く不可能であるとは思えなかった。もともと日本人は、ことばに対する繊細な感受性を養い育ててきた民族である。そういう感受性を武器とする思索によって、ことばに対する高い知恵が、国語学・国文学という呼称の生まれる以前に、すでにいきいきと現われている事例を、われわれはいくらでも指摘することができる。

もし国語教育学の樹立が可能であるとすれば、その可能性の根拠は、ことばに対するこのような思索の伝統をにおいて見いだせないであろう。さらにまた、学の構築を可能ならしめる条件として、近代の日本および外国の国語教育の実態の調査や、関連諸科学、たとえば教育学・心理学の方法・成果の援用ということも、当然必要となってくる。

暗中摸索の末、およそこのような見通しをつけたうえで、一つの地道な入り口を見いだした。私の研究歴から、主として古典を対象とした場合であるが、その理解の方法として、作品形成のうえに重要な役割りを果していることばをとらえ、そのことばの意味と機能を探究することからはいる道がある。それは単に辞書的意義の押し当てではなく、具体的な作品の表象に即して、そのことばの意味と機能をとらえる仕方

である。このような作業は、必然的にその作品の主題・構想・叙述の層に沿って進められるもので、それ自体がすでに作品理解の段階にはいっているということが出来る。国語教育研究の方法としても、このような着眼が十分生かされるものと考えたのである。

たとえば、〃つれづれ〃ということばがある。兼好の徒然草でよく知られた語であるが、歴史的に見れば、平安時代から盛んに使われていたのである。とくに蜻蛉日記以下の女流の作品に頻繁に現われてくることは、きわめて興味ある問題を投げかける。和泉式部は〃つれづれ〃をまぎらすために歌をよみ、日記を書き、恋愛をするのだという。〃つれづれ〃の語義をつぶさに吟味すると、時代と個人を通じて一貫する意義として〃孤独―孤独感〃があることに気づく。孤独性は社会性とともに人間の根本的性格である。したがって〃つれづれ〃は、人間存在の根源に根をおろした語であるということが出来る。内省によってその深淵をのぞきみるのは恐ろしいことである。それをまぎらし、慰めるために、作品の制作という行為に出たのも理由のあることである。

私は今、私の前に二つの道进行い描いている。一つは、和泉式部の文学の研究を介して、和歌世界の構造を解明する道であり、もう一つは、私の古典語研究の方法を適用して、日本文学精神史を跡づける道である。二つとも（この二つはや

がてどこかで相重なるときがあるはずである）、私の余生をかけるに価する道であると信じている。

付記

本稿は、昭和四十二年八月十七日・十八日・二十四日、三回にわたって中国新聞に掲載されたものです。清水文雄先生および中国新聞社のご了解を得て、本紙に転載させていただきました。清水先生および中国新聞社に感謝いたします。